

宮本輝「錦繡」論

——宿命・業を中心にして——

藤村 猛

はじめに

宮本輝の「錦繡」には、「宿命」や「業」・「生命のからくり」などの観念語が出てくる。この小説で表現したい概念なのだろうが、^(注1)その実体は分かりやすいとは言い難いし、主人公たちの中で、一人歩きしている観もある。それは手紙の書き手である有馬と亜紀が普通人であるためであり、哲学者や文学者のように常に思索して、考え続けている訳でもない。例えば、亜紀のモーツァルト体験にしても、幼少の頃からのものではなく、有馬との離婚後のものであり、^(注2)有馬の「業」意識なども、由加子との心中未遂や亜紀との離婚後である。

従来から亜紀のモーツァルト体験や有馬の臨死体験について、様々に論じられてきた。が、手紙の書き手は、市井に生きる普通人である。故に、彼らの考え方は、思索的と言うよりも感覚的と言う方が適切で、逆にそれが、読者との共通地盤を形成しやすくしている。

有馬たちは、互いの手紙のやりとりで、少しずつ考えを深めている。読者も自分のことのように受け止め、彼らの考え、ひいてはこの小説の（広い意味での）「思想」に触れていくのである。

本来、宿命や業といったものが出現しやすいのは、人生の重大事、例えば、人の死際などである。有馬たちの考えや情念は、彼らの生死の狭間で露わになる。それらは、彼らの痛切な体験―有馬の無理心中による死との遭遇や、亜紀の子・清高誕生など―から生じたものであるが、思索的部分はあるものの、情緒的である。

この小説では、生死に関するものとして、由加子の死（また、有馬の死との接近）や令子の祖母の息子たちの死がある。拙論^(注3)において、有馬と女性たちの関係を見てきた。本論はそれを受けて、生死の狭間で出現する主人公たちの「宿命」や「業」などの考察を中心にする。次節以降、令子やその祖母の話から、亜紀や有馬たちへと考察を進めていく。

一 令子と祖母の話

令子の祖母の話は、作品中盤（八月八日付）、有馬が亜紀の手紙（八月三日付）―清高の障害の話―に衝撃を受け、泥酔した深夜に語られる。それまで令子は、有馬と同棲して一年以上たつが、有馬から彼の過去は知らされていない。

令子は横たわる有馬の首の傷（由加子による傷）を触り、しばらく眺めていたが、「ぼそぼそと聞き取りにくい声で、それから次第に熱を帯びた雄弁さ」で、祖母―令子が十八歳の時、七十五歳で死去―の話を語り始める。祖母には左手の小指がなかった。そのことが、祖母に因果応報的な宿命観を持たせていた。

祖母は話の終わりに、きまつて自分の奇形の左手を見せた。

そして、戦場から遠く離れた安全な場所で、人々を戦争に駆り出して偉い人たちは、今度生まれて来るときは、どれもみな人間になることは出来ないに違いないよと言った。戦争に勝った国の偉い人も、負けた国の偉い人も、それは同じだ。蛇やミミズやゲジゲジなどの、人からうとんじられる生き物に生まれるに違いない。よしんば、たまたま人間に生まれることがあっても、きつと人々を死に追いやった罪によって、相応の報いを受け、不幸で短命な人生をおくることになるだろう。そういうときの祖母の顔は、いつも、きゅつとひきしまつて、子供心にとても毅然としたものに映つたように思える。祖母は、人

間は死んでも必ずいつかまた生まれて来ると信じていたようだ。その証拠にと、幼い自分に生まれついて四本しかない左手の指を示すのだった。（八月八日付）

祖母の左手の奇形が即因果応報の根拠と言えないのだが、彼女の毅然とした態度に思いの強さが分かる。祖母によれば、人は生前の善悪に応じて、来世の幸福や不幸が決まっている。特に、人を殺すのは最大の罪で、次の世に人として生まれえない。自分の奇形から、前世の悪を実感し、来世のためにも、今の世は善人として生きようとする。玲子の祖母は素朴で、ある意味、健全な宿命観を持っている。

熱心な聞き手であった令子も、そのような考えを受け入れていて、家族の不幸せや自分の未婚、そして有馬との出会いに、祖母譲りの宿命観で対応している。彼女は善人として、精一杯生きようとしている。それもあつてか、有馬との同棲生活を受け入れ、「一度も自分の考えや感情」を有馬に訴えず、「何を考えているのか判らない、ただ無口で気立ての優しさだけが目立つ、たいして美人でもなく、たいして頭もいいとは言えない女」であつた。だが、彼女は、追いつめられていく有馬のために、新たな商売（美容院のPR誌）を思いつき、それまで貯めていた金を懸けて、実行に移そうとする。たとえ失敗して、金が無くなつてもいいのだとも言う。

「毎日をぼんやり過ごしているだけのあんたを見ているうちに、これはほんまに何とかせんとあかんと考えてん。四百二十万で、

食べて行きながら進められる何かええ商売はないやろか。あんなが元氣いっぱいに取り組めるええ商売はないやろかと考えたんや。」
(八月八日付)

令子は元々、何か商売をしたかったのだが、「あんたのために、うちは、ない頭をひねって考えついたらんや」(九月十日付)と、新商売を有馬のために考えつく。彼女は結婚を求めなくても、有馬との人生を望んでいる。

それに対して、有馬は自分の運のなさを強調して、^(注4)彼女の提案を拒否しようとする。

どんなうまい商売も、俺が手を染めることで、みんな駄目になつてしまう。いままでずっとそうだった。もう商売はなんてこりごりだ。俺には死神みたいなものが憑いているのだ。やりたいのなら、お前ひとりでやれ。
(八月八日付)

努力しないことを、運のなさでごまかしているのかもしれないが、元々、有馬は一流建設会社の課長として敏腕をふるっていた人間である。彼は、「十年の間に、勤めた会社は十指に余りません、手掛けた商売も三つや四つでは」(七月三十一日付)ない。自分の転落を、才能や努力を越えたものとして受け止めたのだろう。彼が腐るのも仕方がない点もある。だが、そんな彼にも支えてくれた女性は何人もいたし、現在の女性が令子である。

前述したように、有馬との出会いは、令子にとって宿命に思えた

のではないか。だからこそ、一年間も文句も言わず、有馬を「飼うて来た」のである。そこには有馬への愛情がある。^(注5)
そして、それは、祖母の戦死した息子たちへのものと近いのではないか。

令子は、首や胸に傷のある有馬の死を心配する。「うち、あんたが死んでしまいそうな気がするねん」。有馬の不幸が彼女を引き寄せた。祖母は、自殺した息子・賢介を「最も愛しく、最も不憫な子として、(略)生涯心の中でだきしめつづけていた」。同様に、令子も有馬の不幸を含めて愛している。だから、有馬が商売を拒否しても、すぐには諦めない。あの手この手を使って、有馬を巻き込む。「無口で溫和しい性格の底に、浪速女の下根性みたいなものを隠している」(九月十八日付)と、亜紀が言うように、有馬と比べて粘り強い女性である。その上、愛情と彼女には祖母譲りの宿命観がある。

二 亜紀の業

亜紀も令子の祖母の話聞き、次のような感慨を漏らす。

そして私はふと気づいたのでございます。私が、清高という子の母だったのでございます。清高も、形は違っていますが、あのお婆さまと同じ、生まれつきの奇形と言っているではないでしょうか。軽度ではあっても、間違いなく清高はそういう不幸を負って生を受けました。なぜそんな不幸を背負って、私の子供は生まれなくてはならなかったのか、(以下略)

清高という人間を生んだ母として、私は、この世に敵として存在している理不尽な不公平や差別の、本当の原因を知りたいと思いました。でも幾ら考えてみても詮ないことでございましょう。詮ないことではございますが、あなたのお手紙を拝見しながら、私は深い物思いに沈みました。あのお婆さまの語った話が、一笑にふすおとき話ではなく、もし真実だったとすれば…… あなたは、妹尾由加子さんについて触れたとき、業という言葉をお使いになりましたね。そして、それはなぜか、あの死んでいる自分を見つめていたもうひとりの自分がつしりとまとわりついて離れて行くこうとしなかつた悪と善との結晶とに、どこかでつながって行く気がしたとお書きになりました。

（八月十八日付）

全面的ではないが、亜紀もまた、令子の祖母の話に衝撃を受けている。もちろん清高の障害は前世の悪の結果ではない。しかし、清高の母として、亜紀は、前世はともかく、これまでの人生を振り返らざるを得ない。成人してからの人生は、自分の責任である。有馬の浮気や離婚、また勝沼との再婚や浮気は、最終的には、亜紀の選択や責任の範疇にある。

彼女は、有馬に問う。

私はきつと、誰と結婚していても、よその女に夫を奪われるという業を持っているのでございましょう。勝沼と別れて、ま

た別の人と結婚しても、きつと同じことが起こるであろうと私には思えてなりません。あなたが業という言葉を使って、それが自分の命そのものにまといついていた悪と善との結晶と、どこかでつながって行く気がしたというくだりを読んだとき、私は、あなたを失ったことも、勝沼が他の女に心を移したことも、みんな私の業というものかもしれないと考えたのでございしました。そう考えてしまうことは、あるいは私のエゴイズムかもしれません。業などという言葉云々する前に、私は女としての自分を振り返らなければなりません。私は、女として、妻として、きつと何か足りないものがあるのかもしれないですね。

（八月十八日付）

亜紀に足りないものは、彼女が言うような「お色気」や「素直さ」ではない。有馬の不倫は、中学時代からの因縁もあったが、彼は由加子と別れようとしていた。また、有馬との離婚は、周辺（特に父・星島照孝）の圧力であり、有馬と亜紀の若さによる未熟さや相互の愛情の浅さ故であろう。同様に、勝沼の浮気は、亜紀の勝沼への愛情のなさにもよるが、主因は勝沼の亜紀への愛情不足である。

亜紀は自分自身に別の原因を求めるが、読者としても、由加子との不倫や無理心中、および勝沼の浮気に対して、なぜ、それらが起こったのか、納得できないものを感じる。男の浮気に対して、有馬は「男の浮気というやつは、もう、しようのない本能のようなものです。男はそういうふうに出てくるのです。何と勝手な言い草かと女性は憤慨するでしょうが、本当にそうなのだから、仕方があり

ません。」(九月十日付)と書くが、有馬や勝沼の浮気は、軽いものではない。有馬は無理心中を仕掛けられても、由加子を忘れないし、勝沼は相手の女性と別の家庭を作っている。

亜紀自身は、もつと分らないではないか。やはり、それらは人間にはどうしようもできない宿命と呼ぶべきものかもしれない。

いずれにしても、「自分の命そのものにまといついていた悪と善との結晶と、どこかでつながって行く」業の重みが、亜紀を動揺させている。

三 由加子の業

由加子は、有馬によって語られる存在である。しかも、由加子の中学生時代、その十数年後、またその十年後というように、手紙が書かれた時点から、その都度に回想されている。(そして、手紙が書かれた時間も、およそ半年の幅がある。)読み手である亜紀との関係で、由加子の叙述は変化している。つまり、有馬の最初の手紙の段階では、亜紀にとって、由加子は見ず知らずの不倫相手の女性に過ぎないが、有馬の手紙によって、由加子は身近な存在に変化する。

亜紀は、有馬との無理心中の状況を知ることによって、由加子を憎みつつも、「懐かしい人のように感じる」(八月十八日付)。だが、有馬の「清乃屋」再訪時の由加子の回想に対して、「美しい女性であった」と嫉妬を感じている。

また、有馬にとっても、中学時代の回想や「清乃屋」再訪での由加子との再会が体感され、彼女が有馬の中で生き続けていく。

だが、有馬はこの時、令子をパートナーとする人生を決意している。それは、亜紀との人生の否定であるし、由加子のいない未来の確認でもある。もつとも、有馬の心情レベルでは現在形のものとして生き続けていく。それは、有馬の業かもしれない。かくの如き業が由加子の本質(業)を呼び出し続けるのだろうか。その時に業は「愛」の性格を帯びる。

この点を二人の出会いから深めてみる。

有馬が中学二年生の時、両親を失い舞鶴に行ったとき、彼の孤独と由加子の美しさと暗さが、互いに呼び合う。有馬が由加子の「無意識のうちに男の誘いを呼び起こす媚態をとって」(三月六日付)いと非難した時、彼女は強く否定し、次のように描写される。

その目はどこことなく悲しげで、いっそう彼女の持つ美しさをきわだたせてくるのでした。そんな彼女を見ると、私はふいにいつもの押さえがたい寂寥感に包まれました。妹尾由加子という少女から発散してくる不思議な暗さは、裏日本の辺鄙な港町のたたずまいと同質なものだったのです。

美しさと暗さの共存が由加子の特質であろう。二人きりになったとき、彼女は有馬に手を伸ばし、額を押しつける。

彼女は、以前から少し好きだったけれど、きょう本当に好きになってしまったと囁いて、頬をすり寄せ、唇を這わせました。(三月六日付)

ここに由加子の早熟だが、好意（愛情）がある。だが、二十年後の有馬は、それを由加子の業だと思ふ。

いまにして思えば、十四歳にして何のためらいもなく男にそのようにふるまえるということが、妹尾由加子という人間の持つていたひとつの業であったと言えるでしょう。業という言葉が、いったいいかなる深い意味を秘めているのか私には判りません。けれどもその言葉は、由加子という女を思い出すとき、最も適切な響きを持って、私の心に浮かんで来るのです。

（三月二十日付）

ただ、男なら誰でもというのではなく、由加子は有馬を、「本当に好きになってしまった」。これが由加子の実体ではないか。彼女の風聞の多くは誤解である。何故ならば十年後の再会時に、彼女は結婚もせず、恋人もいなかった。そして、有馬との不倫中も同じである。多情ゆえではなく、有馬と出会い恋に落ち、「本当に好きになってしま」うと、相手に「したいようにさせる」「誰にもない独特のいじらしさ」（七月三十一日付）が、彼女の業の一面ではないか。

有馬との再会時、彼女の顔は「地味な面立ち」から、「あの幾つかの華やかな風聞を招き寄せていた美貌が甦って」くるように、「狂おしいまでの烈しさをともなったひたむきな恋情」を持つ男性（有馬）に反応し、より美しくなるのではないか。（ただし、この場合は過去の有馬への対応であろう。）

彼女の美しさの源の一つは淋しさ・暗さであり、それらを呼び出

すには、愛情とともに、彼女以上の寂寥感・暗さが必要であり、そういう男性との恋愛に彼女は輝くのではないか。

心中事件の深夜、有馬の前に現れた彼女は、「中学生のときの、あの舞鶴での夕暮れ時、濡れた髪を垂らして横座りしていた由加子」だった。そして有馬の別れようとの言に、由加子は次のように言う。

「明日になったら、私の寝ている間に、帰って行くんでしよう？」私と由加子はしばらく無言で互いの顔を見つめ合っていました。「いつも帰ってしまうのよね。いつも、自分の家庭に帰ってしまう。私のところに帰って来るなんてこと、絶対にあれへん……」由加子は今度はどうなだれてそう言いました。

（七月三十日付）

由加子の悲しみは、存在の孤独にあらう。有馬は「自分の家に帰ってしまう」。彼と別れては、彼女は愛されないし、愛さないのである。有馬しかいない、それが彼女に心中を決意させる。

令子の祖母は、自殺した息子を「最も愛しく、最も不憫な子として、（略）生涯心の中で抱きしめ」る。由加子は有馬を抱きしめ続けたのであり、他の女に渡したくもなく、有馬の「家」となりたかった。だから、有馬も自分も、死ななければならなかった。

だが、死しても、彼女は有馬の中で生き続ける。ここに、令子の祖母の言う、死後の再会の確信があらう。読者は令子の語りにより、由加子の宿命を想像する。

四 有 馬 の 業

由加子の死後、殺されかけた有馬は幽体離脱し、死にゆく自分(命)を見る。そんな不思議な体験から、変わらなければならぬと、彼は亜紀との離婚を決意する。

命そのものを見たことは一つの奇跡かもしれないが、それによる変化や「変わらなければならぬ」との思いは、その後の有馬を縛っている。外見や状況は変わっても、有馬の本質は変わらない。その齟齬が彼の転落の一原因ではないか。彼は「有馬」ではない。

その後、蔵王に宿泊した夜、部屋で見た猫と鼠の争いは、有馬に由加子との死を連想させる。(七月三十日付)

二匹の生き物の絡みを見てみると、殺そうとする者と殺されようとする者との、ぎりぎりのやりとりではなく、心を許し合った者同士の、じゃれ合いであるかのように思えるのです。(中略)もしかしたら、俺は由加子を、あの鼠のように扱ったのではないか。いや、あるいは由加子こそ、いまの猫そのものではないか。(中略) そんなことをあれこれ考えているうちに、突然私は気づいたのです。猫も鼠も、他の何物でもない、この俺自身ではないか、と。自分の生命が孕んでいる無数の心というものの中で、ふいに生じたり、ふいに滅したりしている猫と鼠を見たのだ。

引用文の後半部分から、死と生、殺される者と殺す者の関係が観念的に近づく。これと似たことが、亜紀の書くモーツァルトの音楽の「生命の不思議なからくり」、「生きていることと、死んでいることとは、もしかしたら同じことかもしれへん」(七月十六日付)であろう。

この時点で、「突然私は気付いた」とあるように、彼の思いは、「もしかしたら同じことかもしれへん」とする亜紀以上に深まっている。その後、令子との仕事を始めた有馬の元に、不渡りの手形の取り立てにチンピラが来る。(九月十日付)

有馬は、震える令子を前にして「烈しい空しさ」を感じ、翌朝、令子のアパートを出る。有馬は、踏切で電車が通り過ぎるのを待つ。

近づいて来る電車を見たとき、あつ、電車が来たと思いましたが。(中略)ですが、そう考え始めると同時に、心臓も強く打ち始め、体中の血が、ざあつと音たてて足先に下がっていくような感覚に襲われたのです。電車はすぐ近くまで来ていました。私は目をきつく閉じて歯を食いしばりました。電車が通り過ぎ、遮断機があがり、車や人々が動き出したとき、私は隣にいた人のまたがっている自転車の荷台をしっかりと握りしめていることに気づきました。私は無意識のうちに、自転車の荷台をつかんでいたのです。近づいて来る電車が視界に入った瞬間から、それが通り過ぎて行ってしまうまでの間に、私の何かと何かが、烈しくせめぎ合っていたように思われます。(九月十日付)

生と死との接近である。死が彼を揺さぶり、生と「烈しくせめぎ合」う。

生を取り戻した有馬は、死者を想う。有馬は「清乃屋」で、「由加子」を体感する。

私はその由加子の姿を思い出し、本当にもうじき彼女がやって来るような幻想に襲われました。令子の祖母が言った、またこの世で逢えるかもしれないというあの話が、ある真実味を帯びて思い出されて来ました。(中略)

すべての人間が、死を迎えるとき、それぞれがそれぞれの成した行為を見、それぞれの生きざまによる苦悩や安穩を引き継いで、それだけは消失することのない命だけとなって、宇宙という果てしない空間、始めも終わりもない時空の中に溶け込んで行くのではなかるうか。私は、暗がりの中の、そこだけ青白い光に照らされている床の間に目を注ぎ、浴衣を着た由加子がうつ伏せて死んでいる姿を目の前に見ながら、そんな妄想とも現実ともつかない思いにひたっていたのです。(九月十日付)

亜紀がモーツァルトの音楽で感じたものが、有馬は心中場所(「清乃屋」)で、由加子への強い思いを土台として、想像力や現実と非現実の融解によって、由加子の再現を、現実感を伴って行っている。と同時に、「命」が宇宙という時空の中に溶け込んでいく、と思う。有馬の業は、幽体離脱時で見た「生命」や転落だけではなく、由加子の生を再現し、「生命」の在りようを考えるとところにある。令子

の祖母が自殺した息子を念じ続けたように、有馬は由加子を念じ続ける。それは彼の宿命と言ってもいい。

五 亜紀とモーツァルト、および祈り

次に、亜紀のモーツァルト体験について考える。

モーツァルトの三十九番シンフォニーが登場するのは、七月十六日付のものと最後の手紙(十一月十八日付)である。

喫茶店「モーツァルト」が火事で焼けた夜、亜紀はその曲を聞く。

私はベッドに横になり目をつむりました。いつしか心の中からは、炎も、木のはぜる音も、御主人の姿も消え、あなたと初めて逢った大学時代の夏の日の木陰の涼しさ、あなたと手を握り合って何度も行きつ戻りつした御堂筋の車のテールランプのうつろな光、父からあなたとの結婚を許されて、うれしさのあまり行き先も決めず阪神電車に乗った日の、車窓から見えていた神戸の海のどろりとした輝きなどが三十九番シンフォニーと渾然と解け合って、あるおぼろな、言葉にならない思いに包まれて行きました。そうしているうちに、さつき御主人の言った宇宙の不思議なからくり、生命の不思議なからくりという言葉の秘めている何物かを、私はほんの一瞬理解出来るような気がしてきたのです。(七月十六日付)

亜紀が何かに衝撃を受けた時—この場合は喫茶店の火事—に、

モーツァルトの曲は、彼女を過去に連れ戻し、有馬との過去を呼び起す。彼女も不可解のようだが、「生」と「死」の同一視や「生命」への直感を、「ほんの一瞬」だが、彼女にもたらず。それは彼女に救いとなっている。

だが、それらは彼女自身に力があるとしても、有馬（や読者たち）にはどうであろうか。曲そのものに陶酔感を感じなければ、感動は得られない。もし、あるとすれば、有馬は亜紀の手紙に導かれて、曲を聴いただろう。推測するに、モーツァルトの曲に、有馬の持つ業の暗さや重みを解放する力はないのではないか。有馬の場合は「由加子」に、生活レベルでは「令子」に、その力があると思われる。

いずれにしても、彼らは論理的と言うよりは、情的に業や宿命に對している。だが、亜紀たちが感じる「命」との一体感は、カタルシスをもたらす。彼女らは他者に救いを求めないが、祈りを通じて、相手の幸福を願う。^(注6)そして亜紀は、清高との業を越えて、現在・未来を前向きに生きようとするし、有馬は令子と歩み始める。それは業や宿命への一つの態度である。

美しさと孤独の共存、そして、そこから、愛する人間たちが、自分たちの業や「生命」を鮮やかに出現させていく。宿命が感知される時でもある。

『錦繡』のすこみと優しさは、そういった悲しみと美しさの共存が、そして、宿命や業が「悟り」によって越えられるのではなく、普通の人間の思い（祈り）として語られた点にある。

(注)

1 安藤始氏は、この小説を「宿命と業による人の生き方を描いた作品」と評している。

『宿命と永遠—宮本輝の物語』（おうふう 平成十五年五月）

2 黄麗娜氏は、亜紀のモーツァルト体験について、「あまりにも重視されすぎてきた」と批判している。

『宮本輝「錦繡」論のために—亜紀と靖明・二つの平行線—』（兵庫教育大学近代文学雑誌）17 平成十八年一月）

3 「宮本輝「錦繡」論—有馬を中心にして—」（安田女子大学紀要）38 平成二十二年二月） 論述の関係で、重複する部分がある。ご了承いただきたい。

4 ヒモである彼は、そのことを身勝手だと自覚しているが、同じことを、その他の所でも書いている。

「何をやっても、裏目裏目と出る。何か魔物に取りつかれているような案配でした。」（七月三十一日付）

「俺にはきつと運がないのだ。そんな男と一緒にいると、お前まで転げ落ちてしまう。」（九月十日付）

5 後日、亜紀が言うように、令子は有馬を「深く知っている・烈しく愛している」（九月十八日付）。そして、それらが「私だからわかる」とも言う。こういったセリフを読むと、令子と亜紀の有馬に対する愛情

は、私欲を越えたもののように感じられる。

6 蔵王での有馬たちの再会時、夜空を見る場面では、彼らは宇宙との一体感よりも悲しみに彩られている。が、亜紀の最後の手紙では、宇宙に有馬の幸せを祈っている。

「私はこの宇宙に、不思議な法則とからくりを秘めている宇宙に、あなたと令子さんのこれからのおしあわせをお祈りいたします。」

（十一月十八日付）